

特集

明治・大正期の食肉産業と被差別部落

——屠畜業との関わりを中心に——

本郷 浩二

要約

屠畜場を中心として形成された被差別部落である神戸の新川地区は、外国人から伝えられた屠畜方法と、高度な技術によって「神戸肉」の名声を支えた。同地区では、屠畜場の確立・職人の独立によって屠畜業が産業として成長し、それによって就業機会が創出されたが、大正期に屠畜場が地区外に移転すると、地区の経済・生活状態は悪化した。新川地区の生活空間は屠畜場を軸に豊かな広がりを持っていたが、外部からは、その独自の食文化や、「屠牛の荒仕事」等に関連づける形で、差別的な眼差しが向けられていた。

はじめに

二〇〇一年九月に日本で初めての牛海綿状脳症（BSE、いわゆる「狂牛病」）の発生が確認されて以降、牛井から企業の不祥事まで、食肉をめぐる関心はかつてないほど高まっている。しかし、そのなかで、一般のマス・

メディアが食肉産業を被差別部落と関連づけて取り上げることがほぼ皆無であろう。一方で、匿名性の高いインターネット上などにおいては、従来と異なる形で、偏見や悪意に基づいた差別的な情報が加速度的に増加しているといった問題も指摘される場所である。いずれにせよ、数年来の食肉をめぐる状況は、これまで部落問題研究以外の場においては顧みられることの少なかった食肉

産業と差別との関わりについて、改めて問い直すことを迫っているといえよう。

周知のように、食肉産業は関西圏を中心に、いわゆる「部落産業」の一環として差別と不可分の形で語られてきた。畜産から小売に至る食肉産業の全体を総体的に捉えた研究は少ないが、屠畜業に限ってみれば、近年、特にその労働や技術、屠畜場・食肉工場を中心としたローカルな形での文化等に焦点を当てた、良質なルポルタージュや聞き取りなどが相次いで発表されており、そこでは食肉と差別との関わりにも言及されている¹⁾。

これに対し、歴史学においては、いわゆる業界史や畜産史、食物史といった個別の問題関心から研究がなされてきた²⁾。しかし、その多くが概説的叙述にとどまっている上、前近代社会における肉食の禁忌やケガレ観に言及しながらも、その担い手たる被差別の立場の人々については触れないなど、少なからず問題を孕んでいる。

一方、部落史研究の立場からは、のびしようだが、近世期を中心にその前後の時期までを踏まえて食肉の歴史を分析しており、前近代における食肉の実態や文化的な側面、ケガレ観と身分制など、「食」と差別との関わりを総合的に明らかにしようとしている³⁾。また、近代以降の屠畜業に重点を置いたいくつかの研究からは、屠畜場

を中心として形成される生活空間が新たに被差別部落として再編成される事例なども提示されており、それらから、屠畜業が近代の部落問題を形成する重要な一契機として位置づけられつつある⁴⁾。今後は、上記のような視点から、食肉史研究・屠畜史研究を部落史研究共通の課題としてより積極的に進展させていく必要があるといえよう。

このような研究状況を踏まえ、本稿では、神戸・新川地区（現在の神戸市中央区）における食肉産業、特に屠畜業の展開について検討する。神戸の屠畜業については、その全体像をすでに南昭二が解明しており、本稿もその成果に多くを負っているが、未だ残る課題として、本稿では特に、屠畜場における労働の実態と、屠畜場の周辺に形成される生活空間に注目し、それらと差別のありようとの関連について考えてみたい。その際本稿では、神戸の屠畜業に長年携わり、兵庫県水平社の委員長も務めた前田平一からの聞き取りを資料として多用している⁵⁾。口述資料は、もとより歴史学的な史料批判とは異なる検討がなされなければならないが、思い違いや、後年の再解釈、誇張などにも主観的な意味が含まれていると考え、できる限り歴史的な史料による補完に努めながらも、口述内容はそのままの形で用いることとした。

なお、本稿で検討する神戸では、周知のように明治期から積極的な形で食肉産業が展開されており、明治・大正期の食肉についてみると、重要なフィールドの一つであるが、それにとどまらず、後にみるように、新川地区は、上述した屠畜場を核とする被差別部落の再編成という点においても一つのありようを示している。

一 屠畜業の展開

近世期の兵庫県下における食肉については、その実態がかなりの程度明らかになってきているが、その一方で食肉を目的とした生牛の屠畜がどの程度行われていたのかは未だ判然としない。伝承によれば摂津国有馬郡三田や播磨国印南郡志方（印内）において近世期から食肉を目的とした生牛の屠畜が行われており、特に後者では年間三、四百頭から一千頭にも及んだといわれるが、その詳細は明らかではない。⁸⁾

しかし本稿で検討する神戸については、現在のところ、このような近世期における生牛の屠畜という前提が確認されていない。神戸の屠畜業成立に最も影響を与えたのは、居留地を形成した外国人による食肉需要だったと考えられる。明治初期の神戸の屠畜業については以前に検

討したので、以下、その概要のみを述べることにする。⁹⁾

一八六七（慶応三）年一二月の神戸開港前後から、外国船員の食料として牛豚肉の供給が求められるなか、英国人のキルビーによって最初の屠畜場が設けられ、これ以後、神戸には英国人・米国人・清国人等、九名の外国人によって七カ所の屠畜場が設置された。¹⁰⁾ 次節で詳述するが、この外国人経営の屠畜場で行われた屠畜方法を「神戸肉仕立て」といい、後の「神戸肉」ブランドを支える屠畜方法に大きな影響を与えたといわれている。これは同時に、屠畜プロセスに影響を与えるほどに、外国人による肉の需要が重要視されたことも意味しよう。このように、神戸における屠畜業には、当初から外国人が大きく関与しており、近世期からの伝統的な生牛の屠畜技術（斃牛馬解体技術とは別）との連続性は相対的に希薄であったといえるのではないだろうか。

次に、日本人による屠畜業の開始についてみていこう。開港当初、先述した外国人による屠畜だけでは増大する需要に供給が追いつかず、神戸の中央部に位置する宇治野村風呂ヶ谷の「えた」が屠畜に動員されたという記録があるが、これは、「斃牛馬勝手処理令」「解放令」以前の段階においては、生牛の屠畜も「えた」の役分として、斃牛馬処理の延長に解釈されたことを推測させる。この

後、さらに食肉需要が拡大するなかで、事業として屠畜に従事する者が現れ始め、一八七〇（明治三）年、商社の一つである宇治野組は、屠畜場を経営するに至ったという¹²。この宇治野組については十分な史料がなく、その組織の実態を明らかにすることができないので、仮説の域を出ないが、商社の創設が「斃牛馬勝手処理令」「解放令」以前であることや、先述した屠畜への動員の事例などから考えて、宇治野村風呂ヶ谷の「えた」が参加していたとみえることも可能だろう。斃牛馬の解体・皮革業に従事していた「えた」身分の者が、技術的な蓄積を生かし、外国人を中心として新たに勃興した産業である屠畜業に参入したものと考えられよう。ただし、経営主体は別にあり、屠畜に関わる権益からは排除されながら、技術的な部分においてのみ「えた」身分の者が動員されていたという可能性も否定できない。

日本人経営の屠畜場はこれ以後乱立する傾向にあったが、何度かの移転・統合を経て、一八八四（明治一七）年前後に、外国人経営の屠畜場とともに、新生田川の東岸、後の新川地区に相当する位置に集中的に設置されることとなる¹³。これが、新川地区形成に至る直接的な契機であったと考えられよう。南昭二は、これについて「神戸屠畜会社、熟皮会社、木蠟製造所、肉小売り業者およ

び牛馬問屋、その他の労働者が移住してきている。それに従業者の家族が加わり、さらに近くから、あるいは遠くからの部落から仕事を求めて新川の南地区に集まってきた（中略）したがって屠畜業は、量的には確認できないが、かなりの程度の吸引力を持ったのではないだろうか」と指摘している¹⁴。新川地区形成の要因としてはもう一つ、貧民労働者の移住についても検討されなければならないが¹⁵、少なくとも、屠畜場の移転を契機として、同地に屠畜業を核とした生活空間が形成されたことはひとまず首肯できよう。

以後の展開を簡単に追っておこう。一八九〇（明治二二）年、森谷類蔵他数名が、従来からの日本人経営屠畜場と、前年に買収された外国人経営の屠畜場を統廃合し、新生田川尻（すなわち新川地区）に設定期限一〇カ年、資本金一萬円で神戸屠畜株式会社を發足させ、屠畜場も新設している。「其の建物は全部煉瓦を用ひ地盤の如きは堅固なる板石を使用し従来木造の者¹⁶に比し頗る面目を改めたり」であったという。

この神戸屠畜株式会社は一時期、神戸の西に位置する兵庫方面（現在の神戸市兵庫区・長田区周辺）の屠畜場も合併し、独占的な状況を誇っていたが、一九〇二（明治三五）年、市内の牛商および牛肉商等によって兵庫の東

尻池に株式会社神戸家畜市場が発足し、その附帯事業として屠畜場が開設されると、牛商・牛肉商のニーズに応じやすい新屠畜場へと需要が移り、神戸屠畜株式会社は規模を縮小せざるをえなくなった。さらに一九〇六（明治三九）年、屠場法が發布され、既設の屠畜場は三箇年後に新たな設立許可を受けるよう定められると、神戸屠畜株式会社は屠畜場は一九〇九（明治四二）年、廃場に至った。なお、東尻池の屠畜場は、これ以後数年にわたって神戸市内唯一の屠畜場として存続したが、一九一九（大正八）年には、兵庫新湊川尻に開設された市営屠畜場へと一本化を遂げている。¹⁶

二 労働と生活空間

一九二六（大正一五）年、神戸市役所衛生課が作成した『神戸市衛生施設大観』に添えられた「屠殺系統図」には、生牛が神戸へ移入されてから屠畜・解体に至るまでの過程が、一阶段に分けて図解されている。¹⁷ ことから、当時の屠畜業の工程を再現してみよう。「屠殺系統図」によれば、神戸に到着した牛は家畜市場において牛肉商によって買われ、屠畜場へと運び込まれる。以後は、未検査牛繋留所→洗滌所→牛体検査所→生体秤量所→既検

査牛馬繋留所を経て屠室へ、という工程を辿っており、屠室での作業はさらに、屠殺・瀉血・解体①・解体②の四つに分けられたうえ、それぞれについて以下のような説明が加えられている。

屠殺

道具は尖った鉄槌と特殊の銃と二種ある。小牛には前者を、壮牛には後者を用ひます。眼前に立てる屠夫は狙を定めて前頭部眉間に向つて発射します。其瞬間あの大きい牛は声もなくドツと倒れて仮死状態に陥ります。

瀉血

直ちに傷口から籐製の尖つた棒を突き入れ脳を刺して息を止めると同時に首の大血管を切つて急速度で瀉血します体の温かい間に……

解体①

血を充分出した後些の猶予もなく庖刀を当て、瞬く間に全身の皮を剥き次に腹を豎てに割きます。

解体②

後肢を縛つて天井のレールから下つてゐる鎖に逆に釣るし其下に内臓運搬器を置き内臓を全部之れに引き出し、次に頭尾と膝から下を断ち切り、最後に背骨に沿ひ体を縦に両断します。之を背抜きと謂ふ。

このような工程を経た後、「検査官の検印を受けて骨附

の儘牛肉店へ運ばれ数日を経て種々の等級に分つて販売」された。屠畜に使用する道具や解体の順序等に細かな差異はあるものの、基本的には現在と大差のない流れ作業式の工程が、少なくともこの時点において確立していたことが窺えよう。また、作業の難易度が高く、徒弟制度のもとで伝達される技術と、熟練を要するといった点についても、現在と変わりがなかったと推測される。

なお、それぞれの工程における副産物についても、「外皮は塩をまぶし外皮置場に留め、後皮革商に」「頭より肉を取り其残骨類と角、蹄も細工用として大阪に送ります」「内臓は再び検査官が肺、肝、心臓等を検査し異常なきものは内臓扱室で処理し全部食用のため牛肉店へ」「流血は敷石の溝を伝つて一定の場所に溜る、之れを乾燥して肥料とする」というように、当時からほとんど無駄にすることなく利用されていたようである。ただし、これらの工程は当史料の年代からみて一九一九（大正八）年に市立神戸屠場が開設されて以降のものであり、それ以前の屠畜業における作業工程の実態については明らかではない。

次に、屠畜業の就業・雇用の形態であるが、明治末年頃から屠畜業に携わっていた前田平一は、当時の屠畜場での諸関係を次のように説明している。

屠牛場のしきたりで、肉の間屋というものは牛を屠牛場へ追いこむと、あとは屠夫の仕事でして、骨つきの肉にして問屋へ渡すのです。皮、内臓、頭肉、尾ば、舌は全部あとへ残して渡すのです。これはその牛が良いとか悪いとかにはかかりありません。一匹分でなんぼと定められてありました。（中略）明治の初めには屠夫というものは肉問屋の使用人として、その地位は奴隷でした。この奴隷的な屠夫が牛を追い追い屠牛場へやって来て、牛をおとし、皮と内臓を屠場へ残して車に肉をつみ、引いて帰っていったものです。彼らは家へ帰ると、早速、板場として骨と肉をさばきわけ店頭¹⁸に並べるところまでしていた。

このように、当初は直接屠畜に従事する「屠夫」が肉問屋に従属していたが、やがて、

それが肉屋と問屋が別になるようになり、また屠場というものが確立し、そこで働く屠夫も一人前の職人として独立するようになって、働く者の権利というのですか、何といつても屠夫が手をおろさぬかぎり仕事にならなくなつてから優遇されるようになったのです。その結果が神戸屠牛場では、肉は肉、内臓は内臓屋の取り分と定まつたわけです。そのかわり屠夫の教養の向上にも、いろいろ手を打ちましたね。まず仕事のあいまには飯もくわ

ずんばやっておりますました博奕を、こと屠牛場内に於いては一切禁止をしまして、その自粛を行いました。この事は博勞仲間にも及びまして、牛市場での博奕禁止にと發展19しました。

とあるように、屠畜場に働く職人として相対的な地位の向上をみている。しかし、前田の回想には年代が記されていないため、前田のいう屠畜場の確立・職人の独立がどの時点で果たされたかは明らかではない。これを一八九〇（明治二三）年の神戸屠畜株式会社設立が契機であったと仮定すると、一八九八（明治三一）年生まれの前田が直接体験した内容ではなく、その証言には疑問が生じてくることに留意しておきたい。

ところで、先述したように、神戸の屠畜場で行われていたのは、「神戸肉仕立て」という独自の屠畜プロセスだった。これについて前田は、

肉の間屋さんが牛を仕入れると早くて一週間、長ければ十日ぐらい自分の厩で、その牛を飼うのです。その際に牛に水を与えません。牛に水を与えると水が体にまわって水気の多い肉になるのです。そうすると肉の重量は増しますが、味がおちるのです。刃物で切っても包丁についてはなれないような肉になるのです。そうするとカノコ肉のようなはえた色の肉には決してなりません。それで

前にも話しましたが一週間か十日、水切りを行い、その間に脂になる大豆とか麦などを食うだけくわし、牛の体に脂肪が十分まわった時おとすのです。そうして又一週間ぐらいますのです。台湾バナナが日本に着いただけではシブクて食えず、一週間ぐらい室でうます、あれと同じですよ。ですから神戸肉はまないたに乗せ、包丁で切りますと、そのまま、ピタッ！ピタッ！とまな板へたおれるでしょ。そうして焼肉にしてもスキ焼にしても、分量が減らず、味がよい、この肉の仕立かたを神戸肉仕立てといつて、全国で有名になった。この仕立てかたでない外国人に買って貰えなかつたわけです。居留地内の領事館でイジンさんがしていた通り、この方法を守ってきたから、神戸肉の名を高からしめたわけで、このようにするとなれば、たとえば肉問屋さんが、毎日三頭づつ肉を市場へ出すとすれば、最低三十頭ぐらいの牛を常時厩（うま）に縛い（ひ）でいなければ商売に成らなかつたので、どの家も大仕掛（お）になつていたので20

と、その方法を詳しく紹介している。元々居留地内の領事館で「イジンさん」が行つていた方法を導入したという点は、神戸における屠畜業の成立過程を考へる上で興味深い。また、この屠畜前の「水切り法」、屠畜後の「熟まし」と並んで重要なのが、「屠殺術」であつた。

尚一つ屠殺術の巧妙な事は誠に天下一品で、最初の一撃の許に見事往生させて了ふ手際は感心の外はない、何んでも屠殺の際に余りの苦痛を与へると血液が全身に廻つて甚しく風味を害するからだとは専門技師の談である⁽²¹⁾ というように、技術的な難易度の高さもまた、「神戸牛」の名声を支えていたといえよう。

次に、このような屠畜場を中心に形成された共同体・生活空間についてみていこう。前田は、屠畜場の周辺に形成された新川地区について、以下のように述べている。

世間で新川というたら神戸の代表的なスラムのように考えておられるが、それはとんでもない間違いであつて、私らが覚えている新川とはぜんぜんちがいます。(中略) 南本町すなわち新川の人たちは主として屠牛場関係がほとんどで、多少、日雇に行つていた者もあつた。しかし屠牛場出入りの者で、金に不自由をするような者はいなかつたと思います。特に肉の間屋さんなどは、どの家も牛の二十頭や三十頭を縛ぐ厩を持つ大まがきですよ、どれらいものでした。森岡、藤井、淡路屋、その他何十軒という大物ばかりで、この事を今の新川で知つてゐるのは私だけですが、どの問屋でも男女併せて何人も使用人を置き、毎日、牛追い人足や厩の世話掛り、肉さばきの職人とそれはそれは賑やかでした⁽²²⁾。

このようななか、屠畜場で働いていた前田は、

この頃私は毎日昼は屠牛場で一人前働き、帰りにその日、おとした牛の内臓を車につんで持つて帰る。すると下受けの連中が籠を持つて待ち受けており、一まるいくらで値段がきめてあり、取りやい⁽²³⁾をして売りにはしるのです。一丸という和一匹の牛の内臓全部のことですが、この値段が屠牛場で私が勘定するねだんと、下受けに渡すねだんとの間がだいたい一人前の働き分ぐらいあつたと思います。やすみの日がいはいは私らの組で取扱う牛は二十匹から三十匹ですから、それこそトグワで諸を掘るほど、金は儲けていたと思えますね⁽²⁴⁾ といった状況であつた。ここにみられる新川地区の経済的な豊かさは、

私の村新川という町は、外の地区とちがった様子でして、電車通りを境にして南と北にわかれ、北は一般側ですが何分前にも話したように南の方は屠牛場関係者で、経済的に勢力が強かつた。また乞食的存在であるものはただの一人も私の村新川には住みもせず、住ませもしなかつた。事実生活に困つた者があるとすれば、屠牛場へ連れて行き、何なりと仕事をあたえ、自立さしましたからね。所が北へ行くとは何といいますが、随分ひどいのが多くなりまして、博奕のかたに女房や娘を売ることなど朝

飯まえの連中がうようよしていましたから、南が部落だからとて差別されるというような事は、ごく少なかったと思います²⁴

という証言にも表れている。ここにはいくらか誇張された表現が含まれていることは否めず、また、「南が部落だからとて差別されるといふような事は、ごく少なかった」という箇所は、次節で引用する前田自身の証言と少なからず矛盾するが、いずれにせよ、屠畜業が共同体内における就業機会を創出しており、地域の重要な生活基盤として機能していたことは窺えるだろう。このことは、一九〇九（明治四二）年、新川地区の屠畜場が株式会社神戸家畜市場に買収され、兵庫方面に統合・移転された後についての、

この屠牛場が兵庫にかわり、各関係者が、それにつれて移転してから、新川はとたんに人夫稼にならざるを得なかつたと思ひます²⁵

神戸屠牛場が兵庫へ移転してから、悪くなり、現在のようになつたのです²⁶

という前田の回想とも符合しよう。

以上にみてきたように、明治・大正期を通じて、独自の屠畜方法で名声を博した神戸の屠畜業は、屠畜場の確立・職人の独立を経て産業としての成長を遂げた。新川

地区の場合、屠畜業が、屠畜場の周辺に形成された生活空間の重要な生活・経済基盤として機能しており、一般的な労働市場から排除された労働力を吸収していたと考えられる。このような屠畜業の移転は、周辺の生活空間にとつてはまさに死活問題であつたといえよう。

三 屠畜業と差別

食肉に関する近年の研究は、近代化過程における食肉の一般化の前提として、近世期、特に近世後期から広範な食肉の習慣が存在していたことを明らかにしてきた。しかし、そのことが直ちに当該期における食肉に対する忌避感の減退を意味するわけではないこともまた、同時に指摘されている²⁷。徳島県の農家に生まれ、子どもの頃に「決して獣肉を喰つた事はなかつた」ものの、中学校で寄宿生活をするようになってから、牛肉の美味を知つたという歴史研究者の喜田貞吉（一八七一一一九三九年）は、

是は自分の家庭が特に物堅い為で、去る大正三年に十八歳で歿した父の如きは、恐らく一生涯牛肉の味を知らなかつた様であるし、今なほ健在の母も、多分まだ之を口にしたりはなからうと思はれる程であるから、自分の

此の一家の事情を以て、固より広い世間を推す訳には行かぬが、少くも維新前後までの一般の気分は、大抵そんなものであつた⁽²⁸⁾

と、食肉が一般化するなかでの根強い忌避感を回想している。

しかしこのような食肉に対する忌避感が残る一方で、屠畜場と近接した新川地区では、独自の食肉文化が形成されていた。明治の中盤から後半にかけて、いわゆる「下層社会」を対象としたルポルタージュが新聞等に多く発表されるようになるが、一九〇六（明治三九）年に『神戸新聞』紙上に掲載された同種のルポ「葺合新川貧民窟だより」には、この新川地区の食肉文化をめぐって、以下のような記述がある。

一個の特色ある牛の煮売屋あり、こは新川唯一の牛屋にて牛肉をも商ふ、特色とは煮込の材料が牛の精肉に非ずして、悉く臓物なるにあり、曾て或人が何かの文芸雑誌に新川を紹介せし記事中に、此牛屋を特筆大書せしこと有之候、唯見る新川式の粗末なる大鍋に、臓物を縦横無尽に裁断せし片々を無造作に煮込みて是を中皿に盛り一皿一錢にて客に頒つものに候、薄暮店前を通行するさへ異臭鼻を衝きて不快の感を起すとはいへ、点燈頃には千客万来の有様、蓼食ふ蟲も好々、是にて世間の商売は持

てたものに候。⁽²⁹⁾

ここで記者は、新川地区の食肉習慣が精肉ではなく牛の内臓にまで及んでいることに驚きを示しており、この当時、屠畜場周辺以外では内臓を食す習慣がほとんどなかったことを窺わせる。のびしうじは、内臓料理が一般化しなかった理由として、「歴史の短さによる不備ももちろんあるが、差別によって屠場設備をふくむ食肉生産・流通環境が放置されてきたためであった。内臓は下処理の手間がかかる割には市場の閉鎖性で供給過多にあるため高値で売れず、しかも保存がきかなかつた」という理由を挙げている。⁽³⁰⁾ この指摘を踏まえるならば、新川地区の場合、屠畜場に近接し、安価に新鮮な内臓を入手し得たことで、独自の食肉文化を形成したと言い得るだろう。

ところで、このルポに見られる「薄暮店前を通行するさへ異臭鼻を衝きて不快の感を起す」「蓼食ふ蟲も好々」といった表現からは、異なる食文化に対する偏見と忌避感が読み取れるが、このような意識は、食物そのものにとどまらず、その食文化の担い手たる新川地区の住民にも投影されることとなる。例えば、同じく『神戸新聞』に連載された「下層社会」ルポ「師走の新川生活」の第一六信「新平民の生活」では

然し彼等は手を供して餓死を待つ程の馬鹿者でもない、食ふものが無ければ盗んで食ふ、窃盗に出掛ける、女房も子供も坐つては居ない、屑拾ひ兼明巢狙ひ、アガリ、搔浚へに出掛け、夫々手柄をして帰る、食物は屠牛場へ行つて牛の臓腑や曲腸を拾つて来て煮て食ふ³¹

というように、その食文化を住民とされる「新平民」の生活と結びつけて差別的に描き出している。なお、このルポは一九〇七（明治四〇）年に書かれており、先の前田平一の言葉を借りるならば新川地区が未だ「経済的に勢力が強かった」時期を対象としている。ここに描かれた新川地区の姿と、前田が回想する内部的視点との差異には充分留意しなければならないだろう。

当該期のルポでは、食文化と同様に、その生業、特に屠畜業に対しても差別的な眼差しが向けられている。「師走の新川生活」は、先に引用した箇所が続いて、

彼等（新川に居住する「新平民」：引用者註）の犯しつ、ある罪悪の種類は何か、夫も記載して置かねばならぬ。（中略）元より手形、官文書偽造とかの智識を要する犯罪は一ツも無い、手と眼と声とを以てする犯罪である。先祖代々彼等に伝はつて居る屠牛の荒仕事は彼等の性質を残酷ならしめ人を殺す位の事は屁とも思はぬやうになる³²

と記しているが、このように、「屠牛の荒仕事」と「罪悪の種類」を結びつける思考は、形を変えながらも、現在に至るまで屠畜業に対する偏見と差別の基礎に底流しているといえるのではないだろうか。

それゆえ、前節では「部落だからと差別されるといふような事は、ごく少なかったと思います」と語っていた前田平一も、堺利彦との最初の出会いを回想するなかで、以下のような思いを口にしていく。

当時屠牛場で働いているとか、牛殺しをしている者とかは、それだけで世間の人から別の社会に住む者達、悪くいえば人間ではないが如く思われ、道を歩いていても、よけて通り、行きすぎてから振り返って、ペツと唾を吐くのを二、三回も見つた事があり、ムツとした事もあったが、仕事が仕事だからと耐えたものですが、この堺先生のお言葉（「立派な仕事だ、頑張りなさい」：引用者註）を聞いた時は、何か胸のつかえがすうと解けたような気になり恥しい話ですが、涙がほろほろと湧き出した想い出があります。私達が牛を屠すから世間の人たち旨い肉を食べるのやないかと自負している一方、牛殺し、牛殺しの声は四六時中耳の底によんどんでいましたから³³。

前田のこの回想は、いささか平板に過ぎるさらいがあるが、屠畜業に向けられていた深刻な偏見・差別を読み取

ることはできよう。前田の、こうした差別への思いは、栗須七郎との出会いを経て水平社での活動へと結実することとなるが、その栗須との出会い、水平社宣言との出会いについては、

水平社宣言を理論的に割って、割って、割りくだき、噛んで含めるように説明してくれた栗須先生の話は、真に味わい深かったと思います。

夜が明けて、昼間は屠牛場へ行きますが、仕事のあいまを見てはそこで働いている者たちにこの話を、何回も何回もくり返して話しましたね。特に屠牛場の人達は、「ケモノの皮剥ぐ代償に、ケモノの心臓を裂く代償に、部落民という嘲笑の唾を吐かれた」との所では、皆、涙を流して聞きましたね。仕事を終えてからは毎晩、一軒、二軒と話してまわりました。若い者も、年寄りも良く聞いてくれました。新川という所が、その大多数が屠牛場関係の者が多かった故もありますが

と語っており、水平社宣言の一節が、とりわけ屠畜業関係者の心を捉えたことを窺わせる。この後、兵庫県下で最初の水平社が新川地区で結成されるが、その背景に屠畜業と、それへの差別の存在をみることも可能であろう。今後は、水平社の創立と屠畜業の関連といった視点からの再検討も必要となってくるのではないだろうか。

おわりに

以上、明治・大正期における神戸の食肉産業と被差別部落との関わりについて、新川地区の屠畜業を中心に検討してきた。本稿は、神戸の屠畜業の全体像を描き出した南の成果を越え得るものではないのは勿論のこと、雑多な情報を断片的につなぎ合わせただけであり、時系列的な整理もなされておらず、歴史論文としての体すらなしていない。そのため、屠畜場における労働の実態と、屠畜場の周辺に形成される生活空間を、差別のありようと関連づけて捉え直すという、最初に自らが設定した課題についても、不十分な考察となっていることは否めないだろう。

しかしながら、屠畜業を核とした就業の構造や、近接する都市「下層社会」をも含みこんだ独特の食肉文化等、屠畜場を中心に形成される生活空間が豊かな広がりを持つていたこと、屠畜業が高度な技術を要する熟練労働であり、それによって「神戸牛」ブランドが支えられていたこと、にもかかわらず、その食文化や「屠牛の荒仕事」と結びつけた形での差別的な眼差しが向けられていたこと、などを窺い知ることはできたのではないだろうか。

本稿の最初にも述べたように、今後、屠畜業や食肉産業の分析を、個別の分野史に収束させることなく部落史研究に共通の課題として積極的に進展させるなかで、ここで明らかになった幾つかの課題についても、より深化させていくことが求められよう。

註

- (1) 鎌田慧『ドキュメント屠場』(岩波新書、一九九八年)、桜井厚・岸衛編『屠場文化―語られなかった世界』(創土社、二〇〇一年)など。
- (2) 日本食肉加工協会編『食肉加工百年史』(日本ハム・ソーセージ工業協同組合、一九七〇年)、加茂儀一『日本畜産史』食肉・乳酪篇(法政大学出版社、一九七六年)などを参照のこと。
- (3) のびしょうじ『食肉の部落史』(明石書店、一九九八年)。
- (4) 中里亜夫『近代における屠場の変遷』(全国部落史研究交流会編『部落史における東西―食肉と皮革』解放出版社、一九九六年)、猪飼隆明『近代屠畜業の展開と被差別部落』(部落問題研究所『部落問題研究』一六〇、二〇〇二年六月)、藤井寿一『屠畜場成立期の諸問題―和歌山県西牟婁郡の場合』(部落解放・人権研究所『部落解放研究』一五〇、二〇〇三年二月)、拙稿『明治初期屠畜場の変遷と新川部落の形成』(ひょうご部落解放・人権研究所『研究紀要』九、二〇〇三年三月)など。
- (5) 南昭二『明治期における神戸新川地区の屠畜業』(領家穰編著『日本近代化と部落問題』明石書店、一九九六年)。
- (6) 前田からの聞き取りは一九七〇年代前半に行われ、前田平一研究会編『前田平一の歩いた道』(同会、一九八七年)としてまとめられている。
- (7) のびしょうじ『近代成立前後『兵庫』の食肉問題―江戸後期の牛肉食』(『ひょうご部落解放』六一号、一九九五年一月)などを参照のこと。
- (8) 第六回中国六県連合畜産馬匹共進会兵庫県協賛会編『兵庫県畜産誌』(一九一二年)、および兵庫県産業部畜産課編『兵庫県の畜産』(一九二二年)を参照のこと。
- (9) 前掲、拙稿『明治初期屠畜場の変遷と新川部落の形成』。
- (10) 前掲、『兵庫県の畜産』、二〇―二二頁。
- (11) 村田誠治編『神戸開港三十年史』上(開港三十年記念会、一九八八年)、二九〇―二九一頁。
- (12) 前掲、『兵庫県の畜産』、二二頁、および神戸市役所編『神戸市史』本編各説下(一九二四年)、五二二頁。
- (13) 前掲、『神戸開港三十年史』下、五三〇頁、および六一―五頁。
- (14) 前掲、南『明治期における神戸新川地区の屠畜業』、二

七六頁。

- (15) 高木伸夫「兵庫県水平運動と前田平一」(『ひょうご部落解放』三一、一九八八年六月)、布川弘「資本主義確立期の都市下層社会と部落」(『部落問題研究』九五、一九八八年九月)、布川「神戸における都市「下層社会」の形成と構造」(兵庫部落問題研究所、一九九三年)に再録を参照のこと。

- (16) 以上の整理は、前掲、『兵庫県之畜産』、二二二―二四頁に拠った。

- (17) 神戸市役所衛生課『神戸市衛生施設大観』(一九二六年三月)。

- (18) 前掲、『前田平一が歩いた道』、四八―四九頁。

- (19) 同右、四九頁。

- (20) 同右、四三―四四頁。

- (21) 『肉と乳』四卷一一号(一九一三年一月、ここでは、秋定嘉和・大串夏身・川向秀武編『近代部落史資料集成』第六卷〈三一書房、一九八六年〉一八四頁に拠った)。

- (22) 前掲、『前田平一が歩いた道』四一―四二頁。

- (23) 同右、四八頁。

- (24) 同右、六二頁。

- (25) 同右、四四頁。

- (26) 同右、九二頁。

- (27) 前掲、『食肉の部落史』、一九四―一九九頁。

- (28) 喜田貞吉「上代肉食考」(『民族と歴史』第二卷第一号、一九一九年七月)、一六二頁。

- (29) 「葺合新川貧民窟だより」(其八)(『神戸新聞』、一九〇六年七月三日付)。

- (30) 前掲、『食肉の部落史』、六八頁。「師走の新川生活 第一六信 新平民の生活」(『神戸新聞』、一九〇七年二月二十五日付)。

- (31) 同右。

- (32) 前掲、『前田平一が歩いた道』、二〇七―二〇八頁。

- (33) 同右、六〇頁。

- (34) 『神戸又新日報』、一九二三年一月二八日付。